

## 誰が“黒い羊”を排除するのか

### —社会的アイデンティティ理論による集団間・集団内差別現象の研究における個人差要因の扱いについて：レビューおよび実証研究—

大石 千歳

#### 第一部 レビュー

##### 1章. 社会的アイデンティティ理論：社会構造に基づき一様に偏見・差別に向かう社会集団としての人間

社会的アイデンティティ理論(social identity theory、以下SIT; Tajfel, 1978)<sup>1</sup>では、集団成員の個人差の問題を基本的には一旦捨象し、社会集団間の葛藤や力関係などが生み出す偏見や差別の問題を主として扱ってきた。しかしながら、社会集団内の個々の成員の個人差を扱わなければ、日常的な個々の偏見や差別の克服の具体的方策は立てにくい。

従来のSITの考え方では、“どんな人間でも、ある一定の状況におかれれば、ある一定の集団間差別(intergroup discrimination)を示す”という発想で研究が行われてきた。この視点は重要な示唆を含み、この方針で行われた研究は多くの成果を残した。代表的なのは、SIT発生の発端を作ったともいえるTajfel, Billig, Bundy, & Flament (1971)<sup>2</sup>の研究である。この研究では、実験参加者をささいな基準で一時的に集団に分ける、最小条件集団パラダイム(minimal group paradigm)が用いられた。最小条件集団パラダイムとは、コインを投げ上げて表が出た人と裏が出た人とで集団分けをしたり、画家のパウル・クレーとワシリー・カンディンスキーの、素人には何とも解釈しがたい抽象画を1枚ずつ見せて、どちらが好きかを選ばせてその好みによって集団分けを行うなどの方法のことをいう。

Tajfel et al. (1971)では、このように設定した集団分けに基づいて、実験参加者に内集団(ingroup:所属する集団)と外集団(outgroup:よその集団)の成

員に報酬を分配する課題を行わせた。報酬の分配には、分配マトリックス(Tajfel's distribution matrices)と呼ばれる方法が用いられた。この方法は、A集団の〇〇番さんとB集団の××番さんに、報酬に見立てた合計点(例えば15点。マトリックスには何種類かある)のうち何点ずつを分配したいかを選択する方法である。Tajfel et al. (1971)では、分配マトリックス指標によって、外集団成員と比較して内集団成員が厚遇される“内集団ひいき(ingroup favoritism)”の発生が示された。

Tajfel et al. (1971)のこのような設定による実験の目的は、ニュールック心理学(new look psychology)から認知革命を経た当時の心理学の潮流に沿って、最も基本的な人間の認知プロセスそのものの傾向性を検討するため、あらゆる社会状況を排除することであった。このような設定で内集団ひいきが起きたという結果は、人間はただ単に何らかの集団に区分けされたというだけで、自分と同じ集団に分けられた人間を厚遇し、そうでない集団の人間を冷遇するという基本的な認知傾向を持つことを示した。しかもこの研究では、集団の区別には実体(entitativity)が伴わない上、得点を分配する相手は匿名である。このような場合、内集団ひいきの発生に必要なのは、単に相手が自分と同じ集団のメンバーかそうでないかという情報、すなわち集団成員性(group membership)のみであり、個々の集団成員がどんな人物であるかは全く問われないことになる。

内集団ひいきを初めとする集団間差別の発生に必要な条件が集団成員性のみである理由は、以下のように説明される。SITでは、個人の自己概念は、全く個人的な特徴から成る“個人的アイデンティティ”(personal identity)と、内集団の特徴から引用され形成される

“社会的アイデンティティ”(social identity)から構成されるといわれる。そして人は、内集団が外集団との比較状況に置かれたり、内集団の評価が危機に晒される状況下では、自らの自己概念を肯定的に保つため、集団間差別に基づく内集団ひいきによって、社会的アイデンティティの維持・高揚を図る動機を持つとされているのである。

Tajfel et al. (1971)の結果を現実社会での出来事と重ね合わせてみると、第二次世界大戦中のヨーロッパにおける、ナチスのホロコーストが連想される。戦争という状況は、国家という社会集団が他の国家と競争状態に置かれ、しかもその競争に国家の存続が賭けられた危機的状況である。SITの観点からは、このような状況下で起きた集団間差別としてホロコーストを捉える視点を持ちうる。実際のところ、ユダヤ人であるという集団成員性のみを基準に、個人がどんな人物であるかを一切問われず殺戮の対象とされたこの出来事は、自身もユダヤ人でありホロコーストの辛酸を舐めたTajfelが(Turner, 1996)<sup>3</sup>、SITを生み出す着想の源泉でもあった。Tajfelは、ユダヤ人ディアスポラとしてイギリスに在住し、ヨーロッパという国家・民族・社会階層等の社会集団間の関係が入り組んだ地域の現状を鑑みつつ、社会的アイデンティティと集団間差別の関連性について終生考察を深めた。しかしもちろん、SITはヨーロッパに限らず、通文化的にいずれの社会にもあてはまる一般的理論である。アメリカもSITに基づく集団研究は多く存在し(Branscombe, Wann, Noel, & Coleman (1993)<sup>4</sup>など多数)、日本におけるSITに基づく集団研究は大石(2003)<sup>5</sup>に紹介されている。

## 2章. 社会集団内の成員の個人差の扱いを巡る諸問題

### 1節. 内集団への同一視の個人差について

一方で、認知主体の個人特性を扱えないと、集団間差別等の発生およびその抑制の機序について、より詳細な検討がしにくいともいえる。SITでも、内集団から得る社会的アイデンティティを高揚する動機を集団現象発生の根本においているが、この動機の強さに

影響するのは、個々の集団成員の内集団への同一視(identification: 以下、集団同一視)の強さである。集団同一視が強いと、自己概念の拠り所としての内集団の重要度が高まり、自己概念において社会的アイデンティティが優勢になる。

SITに基づく集団研究では、これまで数々の研究で、集団同一視の強さが集団現象の発生をより強めることが実証されてきた。集団現象と集団同一視の強さの関連性について、大石・吉田(2002)<sup>6</sup>では“黒い羊効果”(black sheep effect: Marques, Yzerbyt, & Leyens, 1988<sup>7</sup>)を取り上げて検討している。集団における差別について考える際には2つの方向性が存在し、うち一つは外集団との比較における内集団ひいきであるが、もう一つは、集団内での“仲間はずれ”の問題である。仲間はずれとは、仲間集団の一員でありながら集団に馴染めない、もしくは集団の足を引っ張る者が、仲間とは認められず蔑視され、排除されることである。このような現象を、集団心理学では黒い羊効果と呼んでいる。大石・吉田(2002)では、黒い羊効果が発生する際の動機として、内集団から得る社会的アイデンティティを高揚する動機を仮定しての質問紙実験研究を行い、集団同一視が強いほど、黒い羊効果が強く発生することを示した。

### 2節-1. 社会的態度に関する個人差: 権威主義

集団同一視以外の側面での集団成員の個人差としては、社会的態度や価値観、および性格特性などが挙げられる。社会的態度や価値観としては、個人主義・集団主義、他者への共感性やエスノセントリズム(自民族中心主義)、政治的保守性・革新性などの影響が考えられる。社会的態度やそこから敷衍される性格特性の影響力については、認知者側のパーソナリティの要因がマイノリティに対する態度に影響を与えると主張する、以下のような研究の流れがあった。

権威主義的パーソナリティ説(Adorno et al., 1950)<sup>8</sup>は、精神分析学に基づいたもので、生育の過程において親の権威などに抑圧されて育った個人が権威主義的パーソナリティを身につけ、権威からの抑圧を外集団に向けて発散するため、マイノリティへの蔑視が起きるとする説である。しかし先にも取り上げたホロコー

ストの例を考えると、ユダヤ人に対する偏見や差別は社会全体に共有されたもので、権威主義的なパーソナリティを持つ人間だけが差別に加担していたわけではない。そのうえきわめて短期間に発生したもので、親の養育態度の影響とは考えられない。個人の性格特性に集団現象の原因を求めるアプローチが含む問題点は、このような例に関する説明を提供しえないことである。

このような問題点に加えて、心理学全体において還元主義、すなわち集団は単に個人の寄せ集めに過ぎず、個人の心理過程を説明する理論があれば集団現象もそれによって説明できるはずであるとの立場が主流になっていたこともあり、性格特性に基づくアプローチは一時衰退した。しかしながら今日再び、とりわけ政治的保守性と関連しての権威主義であるRWA（右翼的権威主義 Right-Wing authoritarianism: Altemeyer, 1998）<sup>9</sup>やSDO（社会的優位性志向 Social Dominance Orientation: Altemeyer, 1998. 自集団が他集団に優越することを志向する傾向）といった変数が、マイノリティへの偏見に関する研究で再来を見せている。例えばWhitley & Lee (2000)<sup>10</sup>では、RWA、SDOと同性愛への偏見的態度の関連性を検討している。

## —2. 他の社会的態度：他者との関わり方

大石(2002a)<sup>11</sup>では、個々の集団成員における友人関係観(岡田, 1995)<sup>12</sup>が内集団成員および内外集団への評価に及ぼす影響を検討した。その結果、友人とワイワイ群れるのを好む“群れ傾向”、および友人に細かく気を使う“気づかい傾向”が高い者において、内集団への評価が高いこと、および友人との間での踏み込んだ個人的触れ合いを回避しようとする“ふれあい回避”傾向が高い者は、内集団の好ましい成員も好ましくない成員も同等に高く評価する傾向が示された。しかし、大石(2002b)の実験参加者は大学の文系学部の学生で、内集団は自分が所属する学科であった。すなわち実験参加者にとって、内集団はさほど実体を伴った集団として捉えられておらず、集団同一視もさほど高くはなかったという点が問題として残された。

また、個々の集団成員が内集団成員や他の身近な

人々との心理的距離感をどう認識しているかも、集団現象に影響を与える成員の個人差要因として捉えることができる。各人の他者との心理的距離感を描画により視覚的に捉える、PDM (Psychological Distance Map: Wapner, 1978)<sup>13</sup>という手法がある。大石(2002a)は、この手法を用いて、各実験参加者の心理的距離感と内集団成員および内外集団の評価の関連性を検討したが、明確な結果を得られなかった。先述のように、大石(2002a)の実験参加者は大学の文学系学部の学生であり、日頃自分の所属学科を意識することはあまりない上、描画からは同学科の友人より中学・高校時からの友人のほうを親密な存在と感じていたことが伺われた。これらが原因で、大石(2002a)でのPDMによる検討は、明確な結論を導かなかつたものと考えられる。

ところで、比較文化的な観点を持つ研究として、柿本(1995)<sup>14</sup>が、内集団ひいきを起ししやすい人物を規定する要因として間人主義(濱口, 1982)<sup>15</sup>に言及している。間人主義とは、自己概念の中に他者との関係性がどの程度強く組み込まれているかを示す概念である。この概念は諸外国と比較した際の日本文化、あるいは東アジア地域の文化の特徴として取り上げられることが多いものである。その意味で、SITが通文化的に適用可能であるとの視点を取るのであれば、間人主義とSITおよび集団現象の関連性の検討は行っておく必要がある。

## 3節—1. 性格特性としての公的・私的自己意識

性格特性としては、外向性・内向性、自尊心や自己受容、公的自己意識 (public self-awareness: 見られる自分を意識すること。James (1890)<sup>16</sup>のいうMEにあたる) や私的自己意識 (private self-awareness: 自分から見た自分を意識すること。James (1890)のいうIにあたる) などの影響がこれまで示唆されてきている。これらの社会的態度や価値観、性格特性は、個々の集団成員の内集団への同一視の程度に影響を与えたり、これら自体が直接集団現象の促進や抑制に影響することが示唆されている。

公的自己意識と私的自己意識が集団現象に及ぼす影響に言及した重要な理論として、Abrams (1990)<sup>17</sup>

のSocial Self-Regulation理論(社会的自己制御理論。以下、SSR理論)がある。Abrams(1990)によると、内集団から得る社会的アイデンティティ(SI)を強く意識する場合、公的自己意識、すなわち人から見られる自分を意識する程度が高い実験参加者は、自分が社会的に望ましい人間に見えるかどうかを気にするため、仲間だけをひいきする内集団ひいきや、外集団に対する差別などを示しにくくなるという。すなわち公的自己意識は、世間体を意識するような意識であり、自身の自己概念を意識するようなものではない。

一方、私的自己意識が高い実験参加者は、社会的アイデンティティを強く意識する状況では自己概念の中の、“集団成員としての自分”を強く意識するため、集団成員としての行動、すなわち仲間をひいきする内集団ひいきや、よその集団を差別する外集団差別などを示しやすくなるという。私的自己意識こそが、自身の自己概念に向かい合う意識と捉えられており、SIを意識することと関係があるのはこちらの自己意識であるというのである。

ここで問題なのは、“見られる自分”を意識する際に、意識されるのは誰の視線なのかである。大石(2002b)<sup>19</sup>は、公的自己意識が集団間差別を減少させるというAbrams(1990)の予測が成立するのは、集団成員が世間一般からの視線を意識する場合に限られるとの仮説を立てた。他の内集団成員からの視線を意識する場合には、むしろ内集団の規範を忠実に守り、典型的な内集団成員として振舞おうとし、集団間差別の方向性が助長されると予測した。そして、私的自己意識は、全く個人的な特徴に導かれるアイデンティティと考え、集団現象には影響を及ぼさないと予測した。この仮説をもとに、大石(2002b)では、他者として内集団成員を意識するのか、世間一般を意識するのかによる、黒い羊効果および内集団ひいきの発生状況を比較した。その結果、世間一般意識群では、公的・私的自己意識の両方で黒い羊効果が発生した。一方内集団意識群では、私的自己意識でだけ弱い黒い羊効果が発生し、公的自己意識では内集団ひいきが発生したのである。すなわち、黒い羊効果がより明確に発生したのは、仮説とは逆に、成員が世間一般を意識した場合だったのである。

大石(2002b)のこの結果は、当初の仮説と逆ではあったが、このような結果になったのは、他者として内集団成員を意識するのでは、外集団や世間一般との“比較の文脈”が顕在化せず、社会的アイデンティティ(SI)高揚動機が喚起されなかったためと考えることができる。こう考えると、この結果は社会的アイデンティティ理論(SIT)と一致したものであったといえる。大石(2002b)の結果は、各実験参加者の個人差要因としての公的・私的自己意識が、集団現象をSITの枠組みで捉える文脈に統合され、現象の理解をさらに深める要因として機能する可能性を示すものといえる。

上記の議論をまとめると、以下のようになる。Abrams(1990)は、公的自己意識が高いと、社会的望ましさを意識するので、集団間・内差別は抑制されるとしている。大石(2002b)の仮説では、「内集団成員から見られる自分」を意識した場合は、成員は内集団の規範に沿って集団間・内差別を示し、「世間一般から見られる自分」を意識した場合は、Abramsと同様に集団間・内差別が抑制されると予測した。しかし大石(2002b)の結果では、「内集団成員から見られる自分」を意識した場合は、内外集団の比較の文脈がないため、黒い羊効果はさほど強く発生せず、むしろ「世間一般から見られる自分」を意識した場合に、比較の文脈によりSIが喚起され、黒い羊効果が強く発生した。Abrams(1990)、大石(2002b)の仮説、および結果の三者はそれぞれ異なる方向性を示しているため、今後はこの三者の関係性を整理する必要があるといえよう。

## —2. 他の性格特性：一般的性格特性

大石・吉田(2001a)<sup>18</sup>では、内集団ひいきに対する公的・私的自己意識の影響力と、人間の性格の構成要素の基盤にある5つの主要な要素といわれるBig Fiveの影響力について検討している。Big Fiveとは、外向性、調和性、誠実性、情緒不安定性、経験への開放性の5要素を指す。ここでいう誠実性とは、一つの物事を途中で投げ出さず、計画的に几帳面に取り組む、といった意味合いである。経験への開放性とは、柔軟な姿勢で新しい物事や考えを取り入れることができることを指す。

大石・吉田(2001a)では、Big Fiveにおける誠実

性が高いほど、公的自己意識も高いことが示された。加えて公的自己意識は集団成員性意識を高め、内集団ひいき傾向を強めることが示された。また誠実性は、集団成員性意識の強さや内集団ひいきの強さと正の相関を示した。物事に几帳面に取り組む性格の人は、他者から見られる自分を意識しやすく、自分の所属集団(現実の社会では会社、組織、職業、社会階層などとなる)の一員であることを意識しており、その結果、身びいきの傾向がある、ということである。一方私的自己意識は、開放性の高い人において高いこと、集団成員性意識を強めはするが内集団ひいきには結びつかないことが示された。積極的に新しい経験を求めてゆく人は、他者からの目を気にせず自分自身から見た自分の有り方を強く意識しており、このような人は自分の所属集団を意識してはいても身びいきに走ることはない、ということである。集団現象への影響についてまとめれば、公的・私的自己意識はともに集団の一員であるという感覚である集団成員性を強めはするが、内集団ひいきに結びつくのは公的自己意識のみであるといえる。

加えて、情緒不安定性は、内集団ひいきの強さと正の相関を示した。情緒が不安定な人は、仲間と群れることで安心を得ようとし、身びいきの傾向があるということである。外向性は集団成員性意識と正の相関を示し、調和性は好ましい内集団成員の評価と正の相関を示した。人づきあいが好きな外向的な人や、人と調和して上手にやっつけようとする人は、仲間をひいきする傾向が強いのである。

ところで、上記の結果はそれぞれに示唆に富むものであるが、Big Fiveは人間の複雑な性格の最も根本的な5つの因子を表したものである。内集団ひいきや黒い羊効果などの集団現象の発生・抑制メカニズムにより深く踏み込んだ検討を行うには、Y-G性格検査(辻岡、1979)<sup>20</sup>や新性格検査(柳井・柏木・国生、1987)<sup>21</sup>などの、より多数の因子から構成される、詳細で精度の高い測定指標を用いての検討が望まれる。

#### 4 節. 内集団の構造に関する個々の集団成員の認知の個人差

個々の集団成員の自らの集団に対する見方は、一

様ではない。大石・吉田(2001b)<sup>22</sup>では、内集団への同一視が強い成員は、内集団成員を似た者どうしであると認知する傾向が強いことを示した。また、この内集団同質性認知の強さが、その同質性からはじかれた成員の排除傾向、すなわち黒い羊効果を強めることにつながることを示された。

しかし、内集団の構造に関する個々の成員の認知のしかたの個人差が問題になるのは、内集団同質性認知に限った問題ではない。集団内での上下関係の厳しさ、役割分担の明確さ、中心的メンバーの固定性、自由な発言の許容度、規則の多さや厳しさ、集団活動の活発さ、メンバー同士の好意度など、集団の構造には多くの側面がある。これらに対する各成員の認知の個人差も、内集団の逸脱者を排除する黒い羊効果傾向に関する個人差に影響することが予想される。

大石(2002a)でも、内集団における先輩・後輩関係の厳しさ、役割分担の明確さ、中心的なメンバーの位置付けの固定性について検討を行ったが明確な結果は得られていない。先に述べたように、この研究での内集団は、実験参加者である大学生が所属する学科であり、これでは上記の3要因を扱うには内集団の設定が不適切であったと考えられる。すなわち、この研究における内集団については、集団構造に関する3項目は回答しにくかった点があり、3つの指標の平均値は低く“床効果(floor effect)”の傾向が見られた。このような集団の選択の問題も考慮しつつ、内集団の構造の認知が及ぼす影響についてさらに検討する必要があるといえよう。

### 3 章. 研究者が実験参加者にとっての内外集団をアプリアリに設定することの問題点

2章では、集団成員の様々な個人差要因を扱った研究についてまとめた。本章では、2章4節の問題意識を受けて、SITに基づいて行われる今日の実証研究が共通してもつ手続き的問題点について触れる。すなわち、集団研究に関する実験時に、どのような内外集団を設定するのが適切なのかという問題である。

SITでは、我々は誰しも複数の所属集団を持ち、その時々置かれた状況によって意識する所属集団が

変化し、アイデンティティの定義次元が移動すると述べている。しかしSITに基づく従来の研究の多くでは、内集団・外集団を研究者側が固定して研究されることが多かった。研究者側が実験における内外集団を設定する際には、個々人がどの集団を自分にとって重要な内集団として選ぶか、また内集団を意識させられる状況の有無によって内集団として意識される集団が異なってくるという観点は重視されてこなかった。これでは、実験参加者にとって内集団・外集団が実体を伴った集団にならない場合も出てきて、その場合には要因の効果の検討が十分にできない場合が出てくる。本レビューでも、2章2節-2、3節-1、4節に述べた要因の検討が、内集団の設定が適切でなかったために不十分な結果に終わったことを紹介している。

よって、所属集団として最も重視している集団を自由に選択してもらい、同集団の種類によって内集団ひいきや黒い羊効果の発生のある方や、それらに対する先述の影響要因の効果について検討する必要がある。

#### 4章. 今後必要とされる研究

ここまでの議論をまとめ、今後の研究課題として指摘される5点を挙げ、総括とする。

1. 社会的態度が集団現象に及ぼす影響の検討: 社会集団の個々の成員が、内外集団の立場や関係性を認知する際の個人差要因である権威主義(RWA)や社会的優位性志向(SDO)などの社会的態度が、集団間差別や集団内の逸脱者排除に及ぼす影響を検討する必要がある。すなわち、権威への盲従傾向がある人や、他の集団より自集団を優位に位置づけたい人は、そうでない人よりも内集団ひいきや黒い羊効果を強く起こすのかを検討する必要がある。

2. 友人関係観および他者との心理的距離感が集団現象に及ぼす影響の検討: 個々の集団成員の友人関係観および他者との心理的距離感が黒い羊効果や内集団ひいきに及ぼす影響については、先行研究(大石, 2002a)で用いた集団に実体性(entitativity)が乏しく、明確な結果を得られなかった。今後の研究では、実験参加者にとって実体のある内外集団を設定し、検討しなおす必要がある。

3. 公的・私的自己意識が集団現象に及ぼす影響の検討: 先述のように、Abrams(1990)、大石(2002b)の仮説、結果の三者は、公的・私的自己意識が黒い羊効果および内集団ひいきに及ぼす影響や、その際に他者として誰を意識するかによる結果の相違について、それぞれ異なる方向性を示している。今後はこの三者の関係性を整理する研究が望まれる。

4. 一般的性格特性が集団現象に及ぼす影響の検討: Big Fiveを用いた大石・吉田(2001)では、Big Fiveの様々な変数が集団成員性や内集団ひいきに影響を与えることが示された。しかしBig Fiveは人間の性格を構成する要素を最も集約的に分類した場合の、根本的な5要素である。今後は、より広範で詳細な測定尺度を用いて、集団現象への影響を検討する必要がある。

5. 集団構造に関する認知の個人差が集団現象に及ぼす影響の検討・および妥当な内外集団を設定する必要性: 上記1~4の検討を適切かつ効果的に行うには、実験参加者にとって実体を持ち、集団同一視が高い内集団と、これに釣り合うライバル関係を持つ外集団を設定する必要がある。集団の設定が適切でない、どんな実験も効果的な結論を導けないのである。また、適切な内外集団が選択されることによってはじめて、集団内の上下関係、集団凝集性の高さ、役割分担の明確性、中心メンバーの固定性などに関する成員の認知の個人差が集団現象に及ぼす影響の検討が可能になるのである。

## 第二部 認知者の個人差要因が黒い羊効果の発生に及ぼす影響: 探索的実証研究

第一部第4章に挙げた5つの問題点のうち、1と3については他の研究ですでに扱っているため、本研究では2と4と5について探索的な実証研究を行う。すなわち本研究では、大石(2002a)では検討が十分でなかった、各実験参加者とその内集団成員の心理的距離(PDM)、各実験参加者の友人関係観、一般的な性格特性、および各実験参加者における内集団の集団構造の要因を取り上げる。

集団設定に関しては、本研究では体育専攻学生を実験参加者とする。大石(2002a)が扱った文学系専攻の大学生と比較して、体育専攻は設置されている大学・短大の数も少ない上、学生は幼少時から自分の専門の競技種目に長い競技経験を持つことが多い。それゆえ、体育専攻の学生にとっては自らの大学・高校・中学やその部活動などは実体を伴う集団であり、これらの集団への同一視も高いと考えられたためである。その上で、研究者側が一義的に内集団を設定するのではなく、個々の実験参加者が自分にとって最も重要な集団として選んだものを内集団とする方法をとる。

一般的な性格特性の測定尺度としては多様な性格特性の持つ媒介効果をさらに詳細に検討するため、Big Fiveに替えて、120個の質問により12個の性格特性を測定するY-G性格検査を用いる。友人関係観、他の内集団成員との心理的距離、内集団の集団構造に関しては、先行研究と同じ測定方法を用いる。

## 方法

**実験参加者** 首都圏の短期大学の体育専攻1年次の女子学生72名。

**手続き** 授業時間中に質問紙を配布し、集団形式で実施した。その後引き続き、Y-G性格検査(以下YG)を行った。

プライムあり条件とは、最初に自分にとって重要な集団を記述し、その集団への同一視を測定し社会的アイデンティティ(SI)を顕在化させた状態で20答法とPDMに回答する、すなわち内集団を強く意識させられた(プライムされた)状況で、20答法とPDMに回答してもらう条件である。プライムなし条件では、20答法とPDMに回答した後で重要な集団を記述し、集団同一視を測定した。プライムあり条件はN=36、プライムなし条件もN=36であった。このような2条件を設けたのは、20答法とPDMで個人の表象のされ方において、内集団を顕在化されるか否かにより、どの程度アイデンティティの定義次元が個人的アイデンティティ(PI)からSIの方向に移動するかを見るためである。

質問紙の内容(本研究に使用した部分のみ)

**第一質問紙:1. 友人関係尺度(岡田、1995):**近年の青年の友人関係観に関する個人差を測定するもので、“触れ合い回避”“群れ”“気づかい”の下位尺度から成る(4件法)。触れ合い回避は“お互いのプライバシーには入らない”等の6項目、気づかいは“相手の考えていることに気をつかう”等の6項目、群れは“ウケるようなことをよくする”等の5項目であり、計17項目

**2. PDM:**18cm四方のスペースの真ん中に自分を意味する●印を置いて、●の周辺に自分を取り巻く他者を意味する○を描画する課題である。描画中に描かれた重要集団成員の人数と、重要集団成員との平均的距離を指標化する。距離は、野崎(2000)<sup>24</sup>を参考に、PDM中の最も遠い位置に描かれた者との距離を1としたときの、PDM中の重要集団成員の平均距離とする。●の中心から○の中心までの距離をミリ単位で測定し、内集団成員全員の平均距離(ミリ)を求めた後、比率に換算したものである。

**3. 重要集団の選定:**自分にとって重要な内集団を、1位~3位まで順に挙げ、うち1位の集団を“重要集団”とした。

**4. 重要集団への同一視(identification):**集団同一視尺度(Karasawa、1991)により測定した。項目は以下の7項目である(1.「あなたは○○(1位に挙げた集団。以下同様)らしさがありますね」といわれたとしたら、あなたはその表現が自分にあてはまっていると思いますか。2.「あなたは○○らしさがありますね」といわれて、よい気持ちになりますか、それとも悪い気持ちになりますか。3. ○○の友人とそうでない友人とでは、あなたにとって本当に大切な友人は、どちらに多くいると感じますか。4. あなたの考えや行動に影響を与えた人が、○○の仲間の中にはどれくらいいると感じますか。5.「自分は○○の一員だなあ」と実感しますか。6. あなたは自己紹介する時、○○の一員であることを明らかにしますか、それともふれないようにしますか。7. あなたは、○○の一員であることにどれくらい愛着を感じますか。すべて7件法)。このうち、集団の成員への同一視を測定するIDmemberと呼ばれるグループに属するものは項目3、4であり、それ以外の項目は、集団そのものへの同一視を表すIDgroupと呼ばれるグループに属する。

加えて、各実験参加者が日頃内集団の成員であることをどの程度意識しているかを尋ねる項目を実施した(あなたは日頃、自分が〇〇の一員であるということを、どの程度意識していますか。7件法)。

5. 重要集団に対する評価: 好ましさ、活発さ、優秀さ、感じのよさ(bipolar7件法)の4項目により測定した。これらは、対人認知の基本3次元に優秀さの次元を加えて設定したものである。

6. 重要集団の「好ましい成員」と「好ましくない成員」の評価: 各実験参加者に、重要集団における典型的な「好ましい成員」と「好ましくない成員」を一人ずつ自由にイメージしてもらった。次いで、それぞれの人物について、好ましさに関連の深い10個の形容詞、および集団評価と同じ4項目(好ましさ、活発さ、優秀さ、感じのよさの4次元)で評価した。(形容詞部分の結果は本研究では割愛)

7. 重要集団の構造: 内集団の上下関係の厳しさ、役割分担の明確さ、中心メンバーの固定性、自由に発言できるか、規則は多いか、規則を守ることに厳しいか、メンバーの凝集性、集団の活動の活発さ、メンバー同士の好意度の9項目により評価した(7件法)。

第二質問紙: Y-G性格検査(辻岡、1979): パーソナリティの特性論に基づき、12個の性格特性(D: 抑うつ性、C: 回帰性(気分が変動しやすい)、I: 劣等感、N: 神経質、O: 客観性、Co: 協調性、Ag: 攻撃性(ま

たは愛想の悪さ=ワンマンな傾向)、G: 一般的活動性(動作がきびきびとしている)、R: のんきさ(気軽にはしゃぎ刺激を求める)、T: 思考的外向(物事を大雑把に考え、くよくよしない)、A: 支配性(リーダーシップがある)、S: 社会的外向(人づきあいが好きである)について、個々の実験参加者がどんなバランスで持っているかを各10個、計120項目の質問項目によって把握し、個人の性格の特徴を捉えた。

## 結果および考察

### 1. 実験参加者が選択した重要集団の種別とその集団の構造の特徴

重要集団の内訳は以下の通りであった(Table 1)。プライムなし条件のほうが、20答法やPDMによって個人としての自分について考えさせられてから集団を選んだためか、“家族”と“出身地”を挙げた人数が多かった。すなわち、プライムなし条件のほうが、アイデンティティの定義次元は個人的アイデンティティ(PI)寄りであったのである。自分にとって最も重要な集団として意識に上る集団も、個人にとっての内集団の顕在化の程度に依存して変化することが示された。

重要集団の種別による集団同一視・集団成員性意識は、Figure1に示した通りである。全般に、出身群のほうが重要集団への同一視は高い傾向が見られた。

Table 1  
実験参加者が“最も重要な集団”として挙げた集団

全数	プライムあり条件				プライムなし条件			
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
大学	14	19.4	大学	9	25	家族	8	22.2
家族	13	18.1	大学部活	7	19.4	出身地	7	19.4
大学部活	12	16.7	家族	5	13.9	大学部活	5	13.9
出身地	10	13.9	高校友人	3	8.3	大学	5	13.9
出身部活	6	8.3	出身地	3	8.3	外クラブ	3	8.3
外クラブ	5	6.9	出身部活	3	8.3	出身部活	3	8.3
高校友人	4	5.6	外クラブ	2	5.6	出身高校	2	5.6
出身高校	2	2.8	出身中学	2	5.6	バイト先	1	2.8
出身中学	2	2.8	バイト先	1	2.8	高校友人	1	2.8
大学友人	2	2.8	大学友人	1	2.8	大学友人	1	2.8
バイト先	2	2.8	合計	36	100	合計	36	100
合計	72	100						



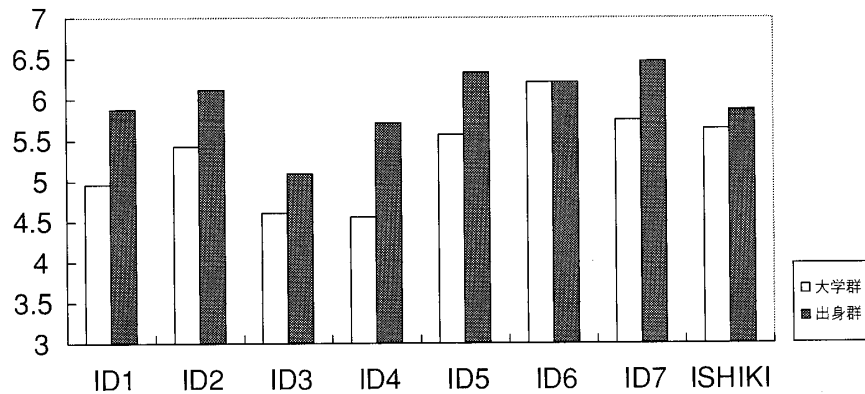


Figure1 重要集団ごとの集団同一視各項目の平均値

特にID4(自分の考えに影響を与えた内集団成員の数:IDmemberの代表的な項目)で、両群の得点差が大きい。重要集団内の成員の間対人的相互作用があるかによって、IDgroupとIDmemberの重みづけが異なってくるといえる。ID6(自己紹介時にその集団の成員であることに触れるか)には差がなく、集団成員性意識の程度にも差は少ないことが示された。

## 2. 重要集団の種別ごとの成員・集団への評価と集団同一視・成員性意識・Y-G性格特性の関連性(Table2)

### ー 1. 性格特性指標と内集団成員の評価の相関関係

A(支配性: Ascendancy)特性: 大学群でも出身群でも一貫して、好ましくない内集団成員の評価と負の有意な相関が見られたのは、A(支配性)特性である。ここでいう支配性とは、会合などを仕切ったり、人をとりまとめたりすることが好きであることを指す。すなわち、A特性は、内集団の好ましくない成員を低く評価して集団から切り捨てる、黒い羊効果傾向を促進させる性格特性であるといえる。A特性の高い個人は、他の成員にも増して、自らが率先して集団のSIを維持・高揚しようとする個人である。そのような成員にとって、集団内の好ましくない成員は、足手まといであり、集団全体の名誉や優越性にとっての脅威として認識されやすいと考えられる。A特性を強く持つ成員は、集団のよきリーダーになる場合も、暴君のような形で集団を支配する場合もありうる。後者のような場合、集団内の逸脱者の排除傾向はより直接的に行動

となって現れてくるのであろう。

S(社会的外向: Social extroversion)特性: A特性の他に両群とも一貫して影響力があったのは、S(社会的外向)特性であった。社会的外向とは、人づきあいを好む社交性をいう。大学群では好ましさ、優秀さにおいて好ましくない成員の評価と負の相関、出身群では好ましさ、活発さ、感じのよさで負の相関が有意であった(優秀さでも、有意ではなかったが負の相関は高めであった)。

G(一般的活動性: General activity)特性: 一般的活動性とは動作がきびきびしているなど、エネルギーがあり活発であることをいう。この得点が高い者は、大学群では、好ましい成員(活発さ次元)を高く評価し、好ましくない成員に関してはすべての評価次元で有意に低い評価を下した。出身群では、大学群ほど高い相関ではなかったため有意ではないが、同じ相関の方向性が見られた。

### ー 2. 社会的アイデンティティ諸指標(同一視・成員性意識)と内集団成員の評価の相関関係

好ましくない成員の評価に関して: 大学群では集団同一視と好ましくない成員の評価のうち活発次元が負の相関となり、黒い羊効果の方向性が見られた。他の評価次元も有意ではないが相関はマイナス方向であり、やはり黒い羊効果の方向性を示した。

出身群でも、集団同一視との相関は負の相関が有意(好ましさ次元)で、他の評価次元も有意ではないが

Table 2  
重要集団の種別ごとの成員・集団への評価と友人関係観・集団構造認知・集団同一視・成員性意識・Y-G性格特性・PDM指標の相関係数

因子群	好ましい成員	触れあつかい	群れ	同一視	成員性	上下	役割	中心	発言自由	規則	凝集性	活動共有	好意度	集団評価	D	C	I	N	O	OO	AG	G	R	T	A	S	PDM人数	PDM距離	
																													好ましさを示す
太子様	好ましさを示す	-0.08	0.66	0.64	0.427*	0.430*	0.26	0.350+	0.227	0.03	0.22	0.167	0.403*	0.292	0.079	-0.126	0.146	0.171	0.021	0.111	0.235	0.104	-0.031	-0.353+	0.146	-0.157	-0.597**	-0.006	
	活発さ	0.140	0.293	0.455*	0.373+	0.276	0.047	-0.016	-0.061	-0.032	-0.162	0.161	0.514**	0.471*	0.178	-0.056	0.114	0.138	0.168	-0.027	0.009	0.352+	0.028	-0.403*	0.067	0.129	-0.566**	-0.008	
	優秀さ	0.162	0.229	0.073	0.449*	0.159	0.149	0.079	0.066	0.122	0.053	0.186	0.256	0.171	0.295	-0.400*	-0.280	-0.161	-0.049	-0.319	-0.140	0.330	0.021	-0.023	0.083	0.305	-0.083	-0.244	
	感じのよさ	-0.265	0.089	0.088	0.504**	0.252	0.151	0.199	0.108	0.235	0.126	0.168	0.303	0.521**	0.248	-0.068	-0.236	-0.092	-0.246	0.055	-0.027	0.132	0.267	-0.173	-0.137	0.251	-0.154	-0.634**	-0.047
太子様	好ましい成員	触れあつかい	群れ	同一視	成員性	上下	役割	中心	発言自由	規則	凝集性	活動共有	好意度	集団評価	D	C	I	N	O	OO	AG	G	R	T	A	S	PDM人数	PDM距離	
	好ましさを示す	-0.08	0.08	-0.09	-0.189	-0.059	-0.170	0.135	0.155	-0.143	0.122	-0.190	0.003	-0.036	-0.114	0.228	0.041	0.140	0.190	-0.203	0.077	-0.295	-0.506*	-0.215	0.033	-0.495*	-0.523**	0.141	0.311
	活発さ	0.023	0.249	-0.056	-0.473*	-0.090	0.263	0.364+	-0.315	0.225	-0.196	-0.078	-0.178	-0.123	0.392+	0.047	0.258	0.335	-0.087	0.245	-0.226	-0.449*	-0.320	-0.314	-0.453*	-0.328	-0.071	0.282	
	優秀さ	-0.211	-0.147	-0.259	-0.313	-0.195	-0.033	0.079	-0.035	0.016	0.073	-0.020	-0.183	-0.098	0.41	0.542**	0.335	0.008	0.248	0.061	0.202	-0.142	-0.552**	-0.099	-0.114	-0.560**	-0.367+	-0.014	0.110
感じのよさ	0.183	0.129	-0.263	-0.141	0.022	-0.029	0.107	0.154	0.003	-0.013	-0.127	-0.034	-0.047	0.080	0.243	0.081	0.200	0.318	-0.185	0.062	-0.227	-0.513*	0.008	-0.141	-0.456*	-0.327	0.137	0.029	
太子様	好ましい成員	触れあつかい	群れ	同一視	成員性	上下	役割	中心	発言自由	規則	凝集性	活動共有	好意度	集団評価	D	C	I	N	O	OO	AG	G	R	T	A	S	PDM人数	PDM距離	
	好ましさを示す	-0.06	-0.165	-0.001	0.155	0.293	-0.036	0.235	-0.043	-0.080	0.164	-0.043	-0.242	-0.085	0.116	0.320	0.112	-0.121	-0.062	0.412+	0.053	0.297	0.084	0.305	-0.421*	0.217	0.210	-0.059	0.163
	活発さ	-0.162	-0.198	-0.106	0.088	-0.140	0.101	-0.391+	-0.554**	0.430*	-0.102	-0.081	0.161	-0.126	-0.210	0.196	0.109	-0.201	0.141	0.219	-0.168	0.191	0.367+	0.065	-0.449*	0.009	-0.002	0.066	-0.359+
	優秀さ	-0.108	0.051	0.150	0.10	-0.080	0.185	0.494*	0.283	0.274	0.129	0.571**	0.302	0.213	0.618**	-0.032	0.111	-0.058	-0.091	0.293	-0.221	0.007	-0.156	-0.204	-0.046	0.211	0.150	0.265	0.193
感じのよさ	0.086	0.247	0.401+	0.266	0.266	-0.021	0.319	0.417*	0.301	0.025	0.557**	0.249	-0.204	0.553**	0.083	0.167	0.129	-0.017	0.390+	-0.392+	-0.271	-0.239	-0.027	0.072	-0.270	-0.059	-0.061	0.218	
太子様	好ましい成員	触れあつかい	群れ	同一視	成員性	上下	役割	中心	発言自由	規則	凝集性	活動共有	好意度	集団評価	D	C	I	N	O	OO	AG	G	R	T	A	S	PDM人数	PDM距離	
	好ましさを示す	0.090	0.094	-0.050	-0.474*	-0.010	-0.157	0.150	0.145	-0.189	0.181	0.259	0.297	0.098	0.063	-0.065	0.357+	0.337	0.282	0.076	0.234	0.000	-0.325	-0.126	-0.202	-0.439*	-0.458*	-0.462+	-0.381+
	活発さ	0.007	0.142	0.048	-0.033	-0.072	0.040	0.170	-0.005	0.181	0.297	0.408+	0.556**	0.134	0.242	-0.282	0.224	0.150	0.245	-0.242	-0.210	-0.255	-0.091	-0.080	-0.051	-0.438*	-0.387+	0.011	-0.271
	優秀さ	0.246	0.491*	0.154	-0.089	0.266	-0.430*	0.464*	0.524*	0.018	-0.037	0.526	0.275	0.073	0.381+	0.080	0.351	0.311	0.274	-0.046	-0.011	0.039	-0.200	0.036	0.302	-0.429*	-0.330	-0.352	0.256
感じのよさ	0.126	0.258	-0.117	-0.226	-0.042	-0.195	0.273	0.094	-0.047	0.209	0.490*	0.452*	0.101	0.207	-0.075	0.434*	0.320	0.387+	-0.016	0.042	-0.065	-0.284	-0.059	-0.258	-0.495*	-0.440*	-0.290	-0.383+	

注: \*\* p<0.01, \* p<0.05, + p<0.10

相関はマイナス方向であり、黒い羊効果の方向性が見られた。

好ましい成員の評価に関して：大学群では、集団同一視と各評価次元での相関がすべて有意もしくは有意傾向であり、内集団ひいきの方向性が見られた。しかし出身群では同一視との相関は、1つも有意ではなかった。

### 一 3. PDM指標と内集団成員の評価の相関関係

人数指標に関しては、大学群・出身群の両者で有意な負の相関が見られたが、大学群では3つの指標で有意な相関が見られ、大学群でより強い影響が見て取れた。親密な者の人数は少ないほうが、個々の人物との関係が親密であって内集団の好ましい成員への評価が高くなるのではないかと考えられる。この点は今後の検討が必要である。

距離指標では、出身群でのみ有意な負の相関が見られた。負の相関は描画された人物と自分との心理的距離が近いことを示すため、この相関は、内集団成員との心理的距離が近いほど内集団成員への評価が高いことを意味する。先述のように、大学群よりも出身群のほうが、集団成員間の対人的相互作用が存在することが示唆されているため、出身群のほうが心理的距離と人物への評価の相関が明確に見られたのではないかと考えられる。

### 一 4. 友人関係指標と内集団成員の評価の相関関係

群れ指標：この指標の得点が高い者は、大学群でも出身群でも、好ましい成員への評価が高かった(大学群：活発さ次元。出身群：感じのよさ次元で有意な正の相関が見られた)。

気づかい指標：出身群でのみ、好ましくない成員の優秀さと正の相関を示した。

触れ合い指標：大学群、出身群を通じて、有意な相関が見られた箇所はなかった。

### 5. 集団構造指標と内集団成員の評価の相関関係

実験参加者が選択した重要集団の種別ごとに、集団の構造に関する諸指標を算出した。“大学・その部活(以下、大学群)”と“出身地・出身中高・その部活

(以下、出身群)”を比較すると、大学群のほうが出身群よりも上下関係や規則に厳しかった。出身群のほうは、中心メンバーの固定性が高いほか、発言自由度が高く、凝集性や好意度も高い。大学群と出身群とで一貫した影響を与えた変数はなく、大学群と出身群では相関の有無や方向性が異なる場合が多かった。内集団の実際の特徴(対面的相互作用の有無を中心として)と、個々の成員の集団認知の様態の違いは、相互に絡み合っており、好ましいおよび好ましくない集団成員の評価に影響を与えるようである。以下に個々の指標に関する結果を示した。

上下関係：出身群でのみ、好ましくない成員の優秀さと負の相関が見られた。

凝集性：出身群でのみ、好ましい・好ましくない成員ともに、正の相関が見られた。

活動共有性：大学群では好ましい成員、出身群では好ましくない成員の評価との相関が有意であった。

好意度指標(成員間がお互いに好意を持っていると思う程度)：大学群で好ましい成員の評価と正の相関が有意であった。

中心成員固定度指標：出身群で好ましい成員の感じのよさ、好ましくない成員の優秀さと正の相関を示し、大学群で好ましくない成員の活発さと正の相関を示した。

役割分化度指標および中心固定度指標：出身群の好ましい成員の活動性と負の相関を示した。

### 総合考察

#### 第一部(レビュー)第4章の問題意識と第二部の結果の照合

社会的アイデンティティ理論(SIT)に基づく集団研究における、集団成員の個人差要因が集団現象に及ぼす影響について、第一部に紹介した先行研究および第一部での議論と第二部の実験結果を照合し、ここでまとめてみたい。

1. 友人関係観および他の成員との心理的距離感影響：第一部で紹介したように、大石(2002a)では、“群れ傾向”および“気づかい傾向”が高い者は内集団への評価が高いこと、“ふれあい回避”傾向が高い者が、

内集団の好ましい成員も好ましくない成員も同等に高く評価する傾向が示されている。今回の結果でも、群れ指標が高得点の者は大学群でも出身群でも、好ましい成員への評価が高く、気づかい指標でも、出身群では好ましくない成員の優秀さを高く評価しており、大石(2002a)と一致した結果が得られた。本研究では、実験参加者にとって実体を持つ内外集団を設定した上で、群れ傾向、気づかい傾向が強い者は内集団ひいきを示すことが改めて立証されたといえる。

他の成員との心理的距離感に関するPDM指標では、先行研究では明確な結果が得られていなかった。本研究では、大学群、出身群ともに、図中に描かれた人数が少ないほうが、内集団ひいきの傾向を示した。少ない特定の仲間と緊密につき合い、その交友範囲を内集団と認定し、内集団成員を高く評価するのだと考えられる。距離指標では、出身群のみで、図中に描かれた人物との心理的距離の近さと内集団ひいき傾向が見られた。集団成員間の相互作用が存在するためであると考えられる。心理的距離を投影法的に描画した結果と内集団成員の評価に関連が立証されたこの結果は興味深い。

2. 一般的性格特性の影響：Big Fiveを用いた先行研究(大石・吉田,2001a)では、誠実性が公的自己意識を高め、内集団ひいきにつながることで、開放性の高さは私的自己意識の高さにつながるが、私的自己意識は内集団ひいきにはつながっていないこと、情緒不安定性が高いほど内集団ひいきが強いこと、外向性は集団成員性意識を高めること、調和性が高いほど内集団ひいきが強いことが示されている。一方Y-G性格検査(YG)を用いた本研究では、大学群でも出身群でも一貫して、A(支配性)が高いほど、黒い羊効果が強いことが明らかとなった。また、S(社会的外向)が高いほど、大学・出身両群ともに、黒い羊効果が強かった。また、G(一般的活動性)が高いほど、大学群では明確に黒い羊効果、出身群でも黒い羊効果の方向性が見られた。

Big Fiveを用いた研究と本研究の相違点としては、本研究では内集団ひいきというよりも、黒い羊効果に直結する性格特性が析出されたことが挙げられる。外向性については、今回YGを用いたことにより思想的

外向と社会的外向に分けて検討できた。その結果、社会的外向性と黒い羊効果の関連性が示されて、より詳細な結果を得られたといえる。また、A(支配性)という性格特性は、第一部で議論したRWA(権威主義)やSDO(社会的優位性志向)といった社会的態度の基盤となるものと考えられる。そのため、これらの社会的態度がマイノリティへの偏見の強さと正の相関を持つという先行研究と一致した方向性が得られたといえる。すなわち、RWAやSDOといった社会的態度は、集団内のマイノリティである黒い羊効果を排除する傾向を強めると考えられる。G(一般的活動性)も、動作がきびきびとしていることを表す概念であるが、このような者は動作の緩慢な者や要領の悪い者を見るとイライラしやすいのではないかと考えられる。そのため、G特性の高い者は、そのような者を集団内から排除したくなるのではないかと予測される。今後は、これらの考察に関して検討してゆくことが重要である。

3. 集団構造の認知の個人差の影響：先行研究では明確な結果が得られていなかったが、本研究では、大学群のほうが出身群よりも上下関係や規則に厳しいと認知されていること、出身群では中心メンバーの固定性が高く、発言自由度が高く、凝集性や好意度も高いと認知されていたことが分かった。

上下関係を厳しいと認知することは、出身群でのみ、黒い羊効果の方向性を示した。集団凝集性が高いと認知することは、出身群でのみ内集団ひいきを導いた。また、成員が多くの活動を共有していると認知するほど、両群で内集団ひいき傾向が強かった。成員間でお互いに好意を持っていると認知しているほど、大学群では内集団ひいきの方向性が示された。中心的メンバーが固定されていると認知しているほど、両群ともに内集団ひいきの傾向が強いことも示された。

集団構造の認知に関する結果をまとめると、以下のような興味深い考察が得られる。集団の結束の固さや成員同士の仲のよさを示す様々な指標は、大学という社会的アイデンティティの源泉となりつつも必ずしも集団全体での成員の相互作用を必要としない集団でも、出身高校のクラスや部活のような成員間の緊密な相互作用が存在する集団でも、ともに内集団ひいきを導くものである。ところが、これらの指標の中に

は、黒い羊効果の傾向を強めた要因は一つも見られなかったのである。学級集団や部活動における集団を経営する際に目指される、集団凝集性の向上やチームワークの強化は、逸脱者を排除する黒い羊効果とは逆の、好ましい成員も好ましくない成員も高く評価する内集団ひいきの傾向に集団を導くのである。日常生活における集団の経営や指導にこの結果を生かすことが望まれる。

## 注

- 1) 本研究第二部（実証研究）の一部は、東京女子体育大学個人研究報告書（2002）および日本心理学会第68回大会（2004）にて発表された。本論文は、理論的展開に関する部分を“第一部：レビュー”として新たに書き下ろし、“第二部：実証研究”として上記発表を統合し未発表部分を加えた加筆修正を行い、新たに二部構成による研究論文としたものである。
- 2) Y-G性格検査は、研究目的での使用許可が得られた参加者の結果だけを使用した。プライバシー保護のため、質問紙・Y-G用紙には“ハンドルネーム”を記入し、質問紙とY-G用紙のマッチングはハンドルネームで行った。

## 引用文献

- 1) Tajfel, H. 1978 *Differentiation Between Social Groups: Studies in the Social Psychology of Intergroup Relations*. London: Academic Press.
- 2) Tajfel, H., Billig, M., Bundy, R.P., & Flament, C. 1971 Social categorization & intergroup behaviour. *European Journal of Social Psychology*, 1, 149-177.
- 3) Turner, J. C. 1996 Henri Tajfel: An introduction. In W. P. Robinson (Ed.) *Social groups & identities: Developing the legacy of Henri Tajfel*. Oxford: Butterworth-Heinemann. Pp 1-24.
- 4) Branscombe, N. R., Wann, D. L., Noel, J.G., & Coleman, J. 1993 In-group or out-group extremity: Importance of the threatened social identity. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 19, 381-388.
- 5) 大石千歳 2003 社会的アイデンティティ理論による黒い羊効果の研究 風間書房.
- 6) 大石千歳・吉田富二雄 2002 黒い羊効果と内集団ひいき—社会的アイデンティティ理論の観点から心理学研究, 73, 405-411.
- 7) Marques, J. M., Yzerbyt, V. Y., & Leyens, J. P. 1988 The 'black sheep' effect: Extremity of judgments towards in-group members as a function of group identification. *European Journal of Social psychology*, 18, 1-16.
- 8) Adorno, T. W., Frenkel-Brunswik, E., Levinson, D. J., & Sanford, R.M. 1950 *The Authoritarian Personality*. New York: Harper.
- 9) Altemeyer, B. 1998 The other “Authoritarian Personality”. *Advances in Experimental Social Psychology*, 30, 47-92.
- 10) Whitley, B. E., & Lee, S.E. 2000 The relationship of authoritarianism and related constructs to attitudes toward homosexuality. *Journal of Applied Social Psychology*, 30, 144-170.
- 11) 大石千歳 2002a 友人関係意識、集団の構造、および他者との心理的距離が内集団成員および内外集団の評価に及ぼす影響 日本社会心理学会第43回大会発表論文集, Pp664-665.
- 12) 岡田 努 1995 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 354-363.
- 13) Wapner, S. 1978 Some Critical Person-Environment Transition. *Hiroshima Forum for Psychology*, 5, 3-20.
- 14) 柿本 敏克 1995 内集団バイアスに影響を及ぼす個人差要因 社会心理学研究, 11, 94-104.
- 15) 濱口 恵俊 1982 日本人の人間モデルと「間柄」 大阪大学人間科学部紀要, 8, 207-240.
- 16) James, W. 1890 *The principles of psychology*. New York: Holt, Rinehart, & Winston.
- 17) Abrams, D. 1990 How do group members regulate their behavior? : An integration of social identity and self-awareness theories. In D. Abrams and M. A. Hogg (Eds.), *Social Identity Theory: Constructive and Critical Advances*. London: Harvester Wheatsheaf.
- 18) 大石千歳・吉田富二雄 2001a 公的・私的自己

- 意識, Big Fiveと内集団の評価および内集団成員の評価との関連性 日本心理学会 65回大会発表論文集, p814.
- 19) 大石千歳 2002b 集団内の逸脱者の排除傾向を促進する要因の検討 日本心理学会第66回大会発表論文集, p99.
- 20) 辻岡美延 1979 新性格検査法 日本・心理テスト研究所.
- 21) 柳井晴夫・柏木繁男・国生理枝子 1987 プロマックス回転法による新性格検査の作成について(1) 心理学研究, 58, 158-165.
- 22) 大石千歳・吉田富二雄 2001b 内外集団の比較の文脈が黒い羊効果に及ぼす影響—社会的アイデンティティ理論の観点から— 心理学研究, 71, 445-453.
- 23) Karasawa, M. 1991 Toward an assessment of social identity: The structure of group identification and its effect on in-group evaluations. *British Journal of Social Psychology*, 30, 293-307.
- 24) 野崎瑞樹 2000 対人ネットワークの利用パターンについての探索的研究: 資源の種類と親しさの程度からみた利用パターン 社会心理学研究, 16, 1-12.